

琉球大学学術リポジトリ

研究室紹介（沖縄県農業試験場作物部蔗作研究室）

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017190 |

研究室紹介

沖縄県農業試験場作物部蔗作研究室

蔗作研究室の名称に関わる歴史は古く、1960年代まで遡ることができる。当時は蔗作研の中に育種と栽培に関する係があり、サトウキビ全般に関する試験研究を実施していた。1970年代後半にサトウキビ育種研究室と蔗作研究室に分かれ、現在に至っている。

分離後の蔗作研では沖縄におけるサトウキビ栽培上重要なカン水諸元や雑草防除(除草剤)に関する課題に取り組んできた。カン水量およびカン水間隔(間断日数)について明らかにし、マニュアル化するとともに、除草剤については、効果的な薬剤の登録をすることができ、除草剤による雑草防除技術を確立してきた。

さらに、時々の情勢に対応して数多くの課題を遂行してきた。その中で、宮古島における低ブリックスの要因解明(1980年代)や、サトウキビ売買における重量取引から品質取引への移行時における品質評価法の確立や、高品質栽培技術の確立に向けたプロジェクト・研究に参加し、課題解決に一定の役割を果たしたのは記憶に残ることである。

最近の蔗作研は、課題名“サトウキビ作を中心とした低コスト・環境保全型農法の確立”に示されるように、社会的な要請…省力化・低コストおよび環境にやさしい農業…に対応した試験研究を実施している。

“栄養診断”のように重なり合う課題をいくつか抱えているが、実質的には上記の課題に集約される個別課

題群である。実施している試験は・減耕起更新法、・減耕起更新法による土壌流出防止、・豚糞尿および酒粕によるサトウキビ肥料代替性の検討ーサトウキビ畑は自然の腎臓としての位置づけー、・栄養診断事業等である。また、現在画期的な技術として注目を集めている側枝苗の増殖および栽培法試験についても受託試験として実施している。

減耕起更新法については、経営機械部農業機械研究室や化学部土壌微生物肥料研究室の協力によってほぼ完成の域に達している。さらに土壌流出防止機能についても明らかにすべく、他研究室(機械研・土壌保全研)と共同研究を実施している。蔗作研ではさらに一歩進めて管理法まで減耕起法の導入(LPコート肥料を使った中耕・培土の一回化)を計画するとともに、耕作法の相違による土壌内での硝酸態窒素の挙動を明らかにして、地下水への影響を低減させ得る技術の開発～豚糞尿や酒粕施用との関連を含めながら～にも着手していく予定である。

また、近年オーストラリアで試みられている超密植による多収性の検討についても実施していく。その他に、サトウキビ畑での輪・間作についても試験を実施しており、短期輪作作物(2～6月)としてダイズの導入・定着にも力を入れている。

(沖縄県農業試験場 大城 正市)